

Title	華南同族村落における祭祀儀礼の展開 : 儒礼から演劇へ
Author(s)	田仲, 一成
Citation	中国研究集刊. 10 P.1-P.20
Issue Date	1991-06-10
Text Version	publisher
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/60920">https://doi.org/10.18910/60920</a>
DOI	10.18910/60920
rights	
Note	

***Osaka University Knowledge Archive : OUKA***

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/>

# 華南同族村落における祭祀儀礼の展開

—— 儒礼から演劇へ ——

田 仲 一 成

## 一、問題の所在

一般に中国鄉村祭祀においては、宗族祭祀は儒教儀礼により、村落祭祀は道教儀礼によるという分業関係が成立している。特に儒教儀礼は専ら宗族の宗祠での祖先祭祀を担うに止まり、村落祭祀には関係しないのが原則である。これは儒教の「礼は庶人に下さず」という建て前からして当然であり、また郷村の縉士礼生としても「怪力乱神」の跳梁する村落の祭祀に干渉することを屑しとしなかった。この点では仏教僧侶も必ずしも野外の村落祭祀に出仕することには積極的でなかった。仏僧は村落内の富家の法事に出仕することを榮譽とし、野外祭祀に出ることを好まなかったからである。かくして村落祭祀の儀礼を担うものは結局、道教の道士、特に土着道教（巫教）の巫師ということになる。

ただ、このような一般的傾向とは別に、華南、特に広東の大宗族村落にあっては、神誕祭祀や建醮祭祀などの大規模祭祀の場合、村民や道士団が行なう祭祀儀礼が儒教の影響を受けて形

成されている面がある。これは道士団が主催者たる宗族の儒礼指向を尊重して、自らの儀礼構成を儒礼風に加工した結果であると思われる。

一方また、本来、儒礼のみで行なわれてきた宗族の宗祠儀礼においても、宗族がその分支間の結合を強化して組織を拡大してゆく段階で、儒礼の他に俗礼、即ち演劇（元来、道教儀礼と関係が深いもの）が導入されてくる。

つまり、広東の大宗族村落では、本来、俗礼（道教系儀礼）を本則とする村落祭祀が雅礼（儒教儀礼）の影響を受ける一方、本来、雅礼（儒礼）を本則とする宗祠祭祀に俗礼（演劇）が導入されてくるという、いわば雅礼と俗礼の相互滲透が起っているのである。「俗礼の雅化」、「雅礼の俗化」の同時進行と言ってもよい。

しからば何故にこのような現象が起ったのであろうか、その社会背景、歴史の意味はどのように理解すべきか、村落祭祀における儒礼の滲透と宗祠祭祀における演劇の導入とはどのような

な点でつながるのか、等々が問題となる。以下、本稿では、この問題を広東（香港を含む）の事例について検討してみることにした。

## 二、宗族祭祀における儒礼の構造

宗族の宗祠における祖先祭祀が儒礼によって行なわれるのは当然であるが、今、広東省新安県（現香港新界）の郷村宗族について、その状況を概観しておく。

香港新界の錦田鄧氏は、この地域最大の宗族で、水頭村、水尾村、祠堂村、錦慶厝、吉慶厝、泰康厝、永隆厝など七カ村に約三千人の人口を擁する。その中心は水頭、水尾両村にあり、この二村の中ほどに錦田鄧氏の遷徙始祖（十五世祖）とその四子を祀る二つの祠堂がある。始祖洪儀とその長男欽、長孫広舎の系統を祀る祠堂を思成堂、洪儀の次男鎮、三男銳、四男錮の三子とその子孫を祀る祠堂を茂荆堂と称する。両祠堂は同じ三進構造で、寢室（第三進）の中央神龕に初世から十四世祖の連名牌板と、十五、十六、十七、十八世四代の神位を安置し、向かって右に十九世以下の穆祖群神位、向かって左に同じく昭祖群神位を並べる。関連世系図を示す（図1 錦田鄧氏世系図）。右の二つの祠堂のうち、茂荆堂の祖先祭祀については族譜に〈春秋祠堂儀式〉<sup>(2)</sup>が載せられており、その大体を知り得る。以下、これによってその祭儀の概況をのべる。

春秋祀祖祭祀は、祠堂寢室内に奉祀されている神位群を祠堂

の中堂に運び出して行なう。排列の形を図示しておく<sup>(3)</sup>（図2 茂荆堂春秋祠祭儀式配置図）。

祭祀の順序は次の如き段階を追って行なう。

- (一) 中堂・寢室への進饌（排壇）
- (二) 子孫の召集（斉班）

(三) 寢室前で神位を中堂に迎える儀式（迎神）

(四) 中堂に神位群を排列（迎神排位）

(五) 中堂にて賛礼・欽福（正祭）

(六) 神位群の寢室回送の儀式（送神）

各節目について、それぞれ細目があり、構成はかなり複雑となる。これを表示する（表1 茂荆堂春秋祠祭儀式次第）。

以下、このうち、最も中心となる（三）、（五）、（六）について、その式次第を簡説する。

I 寢室前の迎神賛礼

1 排班

通賛の号令で主祭・衆孫が位に就く。三跪九叩頭の礼を行なう。

2 上香の礼

主祭が三回、香を捧げる。罌を進め酒を酌み地に灌ぎ、一跪三叩頭の礼を行なう。

3 初献の礼

主祭は香案の前に跪き、罌を進め酒を酌み罌をもつ。衆孫みな跪す。主祭は迎神の祭文を読む。次のごとし。

維ミに民国△△年歳次△△二月朔△△、越えて△△日△△奉祀す。裔孫△△等、謹しみて清酌・果品・香楮・幣帛の儀を以て敢えて昭らかに○○等列位祖考の神位の前に告ぐ。曰わく、恭しみて惟うに、我が祖よ、主を迎えて中堂に就かしめ、敬しみて奠献を伸べん。虔しみて告げ謹しみて告ぐ。

#### 4 亞献の礼

以上読み終わると、酒を祖先に献じ、次いで饌を献ずる。主祭は香案の前に跪し、再び罍を進め酒を酌み、祖先に酒を献上、次いで「食」を献ずる。

#### 5 三献の礼

主祭は香案の前に跪し、三たび罍を進め酒を酌み、祖先に酒を献じ、次いで幣(紙銭)を献ずる。ここで食を脩すめ、三たび叩首する。

#### 6 焚幣

祝文、紙銭を焚化。

以上で寢室前の迎神賛礼を終り、すぐ中堂に神主を排列。中堂賛礼にうつる。

#### II 中堂賛礼

##### 1 排班

通贊の号令で、報鼓を三回うち、大楽・小楽を奏し、炮を放つ。主祭及び衆孫は整列して位置につき伺候する。

##### 2 盥洗

引贊の号令で主祭以下一人一人、盥洗所に至り手を洗い浄める。

#### 3 整肅衣冠

通贊の号令で全員、一人一人肅衣整冠し、一跪三叩頭の礼を行なう。

#### 4 上香の礼

引贊の号令で主祭以下、香案の前にいたり、三たび香を奉上し、罍で酒を酌み、酒を地に灌ぐ。

#### 5 初献の礼

通贊の号令で、主祭は一跪三叩頭、次いで香案前に跪し、執事が主祭に代って罍を進め酒を酌み、罍をもつ。衆孫はみな跪し、祝祝が祝文を読む。祝文は最初に中央の位置を占める七神位に向かつて読み、次いで右に並ぶ穆祖群、最後に左に並ぶ昭祖群に対して読む。先ず、中央神位に対するもののごとし。

維れ民国△△年歳次△△二月朔△△、越えて△月△日奉祀す。裔孫△△等、謹しんで清酌・香楮・果品・剛鬘・柔毛・庶羞・幣帛の儀を以て祭りを十六世祖考處士謙鎮府君、妣淑德夫人鄭氏に列し、同じく一室に居る。二伝して宴し鹿鳴を賦す。八世にして榮え、豹変を膺す。棣萼芳を聯ね、「葉は」孔懷の雅に叶う。荆花競いて秀いで、蔭は垂れて長く其の祥を發す。茲に、春祀 秋嘗の日に値い、緬として反恭を前人に想い、

爰に明德の馨を薦め、共に仁者の深恩を展べん。伏して願わくは、英靈あきま爽かに格り、実に式に憑りて佑け、科名をして鵠起せしめよ！ 玉堂啓きて金馬風に嘶き、甲第をして蟬聯せしめよ！

玉尺もて量り、金甌もて字を覆わしめよ！ 虔しみて告げ謹しみて告げん。

以上終り、続いて右側の穆祖群に向かつて、次の祝文を読む。

十八世祖考処士諱聰府君、…(以下略)…の列位祖先の案前に致す。曰わく、根深ければ末は茂り、源遠ければ流は長し。祖に大宗小宗の別あり。序に昭たり穆たるの殊あり。愾として見、優として聞く。之に臨めば上にありて右を有つ。左に宜しくして之に質すれば旁にあり。茲に秋分に当たり、祇だ歳事を薦む。腆あつからずと云うと雖も、尚わくは鑿みよ！ 茲にありて伏して願わくは、厚沢旁流して階下に芝蘭の秀を競い、深仁遠く逮んで庭前に玉樹の祥を開かんことを！ 尚わくは饗あげよ！

以上、読み終り、更に左側の昭祖群に向つて、略々右と同文の祝文を読む。

以上、三篇の祝文を読み終ると、主祭、執事は祖先に酒を献じ、衆孫もそれぞれ分献し、終つて主祭は香案上に「饌」を献ずる。

## 6 再献の礼

引贄の号令で、主祭が香案の前に跪し、執事が主祭に代り罍を進め酒を酌み、酒を祖先に献ずる。衆孫も続いて祖先に分献、終つて主祭は香案上に「食」を献ずる。

## 7 三献の礼

主祭は香案の前に跪し、執事が罍を進め酒を酌み、酒を祖先に献ずる。衆孫もそれぞれ祖先の前に分献、終つて主祭は「幣帛」を献ずる。

## 8 飲福、受酢

通贄の号令で、大楽・小楽を奏し、炮を放ち、門をしめる。主祭は祖先の前に行たり、食を侑める。ついで門を啓き、楽をやめる。ここで引贄の号令で主祭は「飲福の位」に至り、跪す。執事が罍を進め酒を酌み、酒を以つて地を祭る(酒を地に灌ぐ)。主祭は再び酒を酌み、罍を手にとると、衆孫はみな跪す。ここで「餼辞」をよむ掛が次の餼辞を読む。

祖は工祝に命じ、茲の多福の無疆なるを承け、汝孝孫に語り、汝孝孫に來れり。汝等をして禄を天より受けしむ。田を稼するに宜しく、眉寿は永平ならん！ 子々孫々替わることなく、これを引け！

以上、読み終り、みな福酒を飲む。

## 9 焚幣

主祭は三たび叩首の礼を三回行ない、幣帛、祝文などを外で焚化する。

以上で中堂贄礼終了。回送にうつる。

## III 回送神主の賛礼

主祭以下、香案の前に跪坐し、主祭が「寢室二回頭スルニ先代ヲ祭ル祝文」を読む。次の如し。

維れ民国△△年歲次△△二月朔△△、越えて△△日、△△奉祀す。裔孫△△等、謹しみて清酌・香楮・果品・剛蠶・庶饗・幣帛の儀を以て敢えて昭らかに南陽堂上鄧氏歴代祖先の神位の前に告げて曰わく、恭しみて惟うに我が祖、積むこと厚くして光を流す。世沢を前徽に振い、創成美を濟し、家声を後裔に啓き、善慶方を伝う。念うに我が孫枝、実に英霊の福を叨く。この春露秋霜を撫し、敢えて追報の誠を忘れんや。豆觴を肅陳し、敬しみて祭典を承く。伏して願わくは、精神感じて格り、几筵に降りて居りて噂けんことを！ 千年にして俎豆懸たり、累世にして簪纓を慶せん！

尚わくは饗けよ！  
以上、読み終り、一献の礼を行なって、神位を寢室に回送する。

以上、要するに全体として三献の礼を二回、一献の礼を一回、合計七献の礼を行ない、三跪九叩頭の礼を四回も行なっていることになる。繁文辱礼の周到を極めたものと言えよう。なお、右の儀式終了後は、衆孫による宴飲が行なわれ、終了は深更に及ぶ。

ところで、右の春秋儀式は、祖先を敬し、酒会を献じて子孫の繁栄を祖先に願うことを目的としていることは疑いないが、

その実態は必ずしも「敬祖」に尽きるわけではなく、むしろ宗族の勢威を対外的に顯示するという効果が期待されていたという。一九七〇年代に台湾中部平原の閩南系宗族、社頭村蕭氏の春祭儀式の沿革と実態を調査された末成道男氏は、その論文「漢人の祖先祭祀（一）」（一九七七）において、この祭祀の主祭が族長でなく、高等文官試験や一流大学の合格者など対外的に拔きんでた者が選ばれている点に着目され、祭祀の性格を次のように総括されている。

祖厝〔宗祠〕での祭祀の内容は、祖先の徳をたたえ、牲體を供え子孫の繁栄ことに科挙を通しての成功を願うというものである。そこには個人的な悩みや頼み事といった要素は稀薄であり、またその祖先に関する具体的な記憶に基づく情緒的な結びつきといったものも殆んどない。むしろ敬祖という形を借りて対外的ステータスの向上と族内の分節間の競争意識を伴った統合強化をはかるという側面を有している。主祭に社会的に成功した者を選ぶことは、外部への誇示と同時に一族の子弟の模範ともなる。集団成員全部が参加する活動というより、むしろ一部のエリートを際立たせるショーとしての性格が濃厚である。したがって公業地〔祖産〕からの収入が減少したり途絶えたと、祖厝での祭祀もそれに比例して縮小したり、廃止になったりする。祭祖が主要な目的であれば、基本財産がなくなっても子孫が費用を出し合うかあるいは供物を各自持ちよるとい

う形で祖厝での祭祀の行事を続け得る筈であるが、こうした形で祖厝祭祀が行なわれているのは蕭姓では一度も見ることができなかつた。

香港宗族の場合、族長が主祭となることが多いので、まだ祖先祭祀の実態を保っているが、参列者には大学生などを加えており、右の「一部のエリートを際立たせるショー」という傾向が強いことは同じである。宗祠祭祀の儒礼の繁瑣な威儀は、こうした「エリートを際立たせるショー」に国家的権威の外被を与える役割を果していると言えよう。また儀礼を維持するために祖産を設けている点も個々の族員の敬祖感情に依存せずに運営して行く組織が必要とされたからであろう。

### 三、村落祭祀における儒礼の滲透

さて、上述の如き宗族の勢威を外に向かつて顕示するという意味をもつ宗祠儒礼の形式は、村落祭祀の場にもその影を落している。村落祭祀には当該村民の範圍だけでささやかに舉行される豊饒儀礼としての社祭や逐疫超幽儀礼としての中元祭祀など、いわば基層的な小規模祭祀と、多数の村外の賓客を招き、村の社交能力を高めようとする目的をもった神誕祭祀や建醮祭祀など、いわば複合的、高次的な大規模祭祀とがある。儒教儀礼は宗族の対外誇示の機能を本領とするため、賓客の来ない基層祭祀には殆んど登場しないが、賓客の集まる神誕祭祀、建醮祭祀にはしばしばその姿を現わしている。以下、香港新界の例

をあげてみる。

#### I 神誕祭祀

現在、香港新界では、天后、北帝、洪聖、車公元帥、金花夫人などの神々に関し、その神誕日に大規模な祭祀が舉行され、特に演劇が献ぜられる場合が多いが、今では演劇が主役となり、村民による献供儀礼は影が薄くなった。しかし、かつては儒礼による献供儀礼が行なわれていたらしく、例えば、新界沙田山厦厝の曾氏一族（客家系）では、車公元帥の誕辰祭祀にあたって、その前夜に次のような「祝旦預晚暖寿祝文」を献じていたことが同村の記録に残っている。

恭しみて惟うに、降誕の良辰、ま屈れるの届を待ちて乃ち肅す。荐馨の微忱、預日に当りて彌々深し。既に諸朝を俟ちて祝嘏の文を行ない、遂に預晩に宜しくして献觴の礼を尽くす。敢えて九如の句に擬して、用って三祝の私を申ぶ。道範に向い、以って性を陳べて、礼は九叩を行ない、徳容に對して暖寿して、爵は三康を進む。伏して願わくは微忱を暎け亨し、更に衆信に階投せんことを祈る。来朝は戲を演じ、道徳に憑りて俳優を鑿みよ！此の日は桃を献じ、神恩ありて紳士を庇せんことを懇す。欣びて五福を歌い、預め千秋を祝さん。尚わくは亨けよ！

この文で明らかかなように、演劇を献ずる正誕日の前の晩、曾氏一族の紳士父老が廟に集まり、「九叩の礼」（三跪九叩首）と「三康の爵」（三献の礼）を行なっていることがわかる。山

夏田曾氏は石工として財をなし、一時は沙田溪谷に覇を唱えたというが、元来、その祠堂は客家式集合住宅の一廂を占めるにすぎず、宗祠祭祀では充分にその勢威を示すことができなかつたため、車公誕辰祭祀の場で、敢えて宗祠儀礼風の儒礼を演出し、近隣諸村の諸姓にその勢威を顕示したものと推定される。文中に「紳士を庇せよ！」とある点からも、この儒礼が曾氏の「エリート」の対外的「ショー」の役割を果していたことを推定し得る。

## II 建醮祭祀

次に華南村落において少くとも十年に一回挙行される建醮祭祀においては、神誕祭祀の場合よりも更に強く儒礼の影響が現れている。この祭祀は過去十年間に積もつた亡霊孤魂の陰気を一掃して陽の気を吹き込み、天地の順環を正常の位置に戻すことを目的としたものであり、規模が大きく、また近隣諸村から招く来賓も多かったから、宗族としては自らの勢威を外部に向かって誇示する絶好のチャンスであった。宗族はこの機会に自らの秘蔵する書画文物を陳列して富力財力を誇示することも少なくない。かくしてこのような条件の下で、「宗族のエリート」を外部に際立たせる「ショー」としての儒礼は、当然その機能を發揮する場を得ることになる。以下、その場面を概観してみる。

### (一) 縉者の諸神に対する儒礼儀式

建醮祭祀は三日四夜、五日六夜など長期間にわたる大規模祭祀で神に対する儀礼部分は道士が担当するが、村落の有力宗族

を中核とする縉士父老も神殿に対して独自の拝礼を行なっており、その礼はやはり儒礼によっている。現在、祭祀の重点は道士儀礼と演劇に移つたため、この縉者拝礼は簡略化され、或は省略されて、目立たなくなつたが、かつては盛大な儒礼風式典が挙行されていたらしい。例えば、さきの沙田山夏田の属する沙田九約の十年一期建醮において、曾氏と並ぶこの地区の有力宗族である大団韋氏が「車公元帥」に献じた「建醮祭文」は次のごとくである（大団韋氏蔵）。

維れ光緒△△年△△月△△日、△△約の縁首○○、郷人等、謹しみて香燭・清酌・菓品・金猪・食饌・竜衣・幣帛・腆からざるの儀を以つて、敢えて昭らかに天后聖母と車大元帥の座前に奉上し、敬しみて祝して曰わく、聖德巍巍として九約同じく厚澤に沾い、神恩浩蕩として萬民共に洪庥を戴く。深恩の時に錫<sup>さく</sup>むるを念へば、宜しく埃を消<sup>おと</sup>びて以て少<sup>い</sup>か酬<sup>む</sup>ゆべし。前に経て闔洞誠を抒<sup>か</sup>べ、共に清醮一屆を建て、茲に後に梨園演唱し、同じく聖壽無窮を慶す。△△村の信士等、誼として同盟に属す。理として当に享祀すべし。ここに於いて虔しみて微物の腆<sup>ちん</sup>からざるを具え、敢えて明法の惟だ馨あらんと云わん。伏して願わくは洋洋として在すが如く、来たり暎け来たり嘗せよ！我が後を啓き、福祿無疆ならん。士は名を金榜に登し、農は大いに倉箱あらんことを！時は和し世は泰く、物は阜んにして民は康ならんことを！虔しみて告げ謹しみて告ぐ。



この文には「前に経て…清醮一屆を建て、茲に後に梨園演唱す」とあるので、道士儀礼の清醮終了后、演劇開始の前夜に韋氏一族の縉紳が神棚に至ってこの祝文を奉献したものと見られる。祝文の形式・文言ともにさきの錦田鄧氏の宗祠春秋二祭のものと同じであり、三跪九叩頭、三献の礼を軸とした儒礼であったことは疑いない。大団韋氏は沙田九約二十三ヶ村の最大の宗族で、二十三ヶ村父老の参集するこの建醮祭祀の機会に自らの縉紳としての勢威をこの儒礼風儀式によって顯示しようとしたものと推定し得る。この沙田九約の山厦團曾氏や大団韋氏のよりに、群小の複姓村落連合の中での有力宗族の場合、自族の声威の對外顯示の場としては、少数の族人のみの宗祠祭祀よりもむしろ多数の他姓の父老を動員できる村落祭祀の方がその効果が大きかったため、村落祭祀に儒礼が足をのばしてくる形になり易かったと言えよう。

## (二) 道士儀礼の儒礼化

次に建醮儀礼の場合、上述の縉紳拜礼とは別に祭祀の主要部分を担当する道士儀礼そのものが一部分儒礼化している点に注意したい。今、屯門陶氏の十年一屆建醮の五日六夜の道士儀礼のうち儒礼部分を示すと表の通りである(表2 屯門陶氏建醮祭祀儀礼日程表)

この表に見るごとく、この科儀は道士儀礼ではあるが儒教系のもの、仏教系ものが混在しており、特に「天」を拝する儀礼に関しては、儒教系のものが多い。以下、その要点を記す。

## (a) 啓壇・発奏

「啓壇・発奏」は道士団が祭礼開始に当たり道壇を開設し、天界諸神を祭場に招く儀礼であるが、このときの〈盥洗〉〈衣整冠〉の二つの科儀はさきの宗祠春秋二祭の中堂贅礼における〈盥洗〉〈肅整衣冠〉を模倣したものであり、形式としては道士団と村の代表である縁首団がそれぞれ一列に向かい合って整列、奏楽のうちに扨子を手にした黒衣の礼生二人が、先ず道士の一人を誘導し、香案の後方に置いた盥架の前に至って手を洗わせ、次いで同じく香案後方に置いた鏡架の前に至り、鏡に向かい衣冠を整えさせる。以下同じ形式で道士全員を、次いで縁首全員を一人ずつ盥洗、整冠せしめる。

次に「賜酒」にうつる。形式としては、右の肅衣整冠のあと、主道士が杯をとり、香案の前の地に酒を漉ぐ。これはさきの宗祠儀礼の〈上香の礼〉のとき、主祭が酒を地に漉いで地を祀り場地を浄める儀礼を踏襲したものである。次いで、対面整列した道士と縁首の一人一人に礼生が酒杯を配り、両集団は歩みよって中央に会し、酒を飲み交わす。これは古代の儒礼〈郷飲酒の礼〉に模したものと見られるが、一面では、さきの宗祠祭儀の「飲福」の形式を踏襲したものと解し得る。以上、極めて儒礼の色彩が濃厚で荘重な威儀を演出している。

## (b) 迎榜

「迎榜」は、天帝に対して村民が全員連名で福を賜うように上奏した奏文(榜)を、天帝が嘉納(批准)し給い、改めてそ

の奏文を榜文として村民に下賜されるのを、道士団と縁首が迎接する儀礼である。さきの「発奏」と同じく、道士・縁首は〈盥洗〉・〈肅衣整冠〉・〈賜酒〉を行ない、最後に道士が奏文〔榜〕に署名して、これを縁首に引きわたす。縁首はこれを受けとり、榜亭にこれを貼る。この大榜接受に当たり、筆頭縁首は赤い襷をかけて臨む。これは宗祠儀礼の「主祭」の姿を踏襲したものである。また雑姓村落では、縁首の外にこの大榜接受の役として特に「攪榜公」を立てる場合がある。「攪榜公」は村内で特に福寿に恵まれたもの（子孫が多く死者のない家の戸主）が選ばれるが、やはり赤襷をかけて臨む。これも儒礼風と言える。

#### (c) 迎聖

「迎聖」はさきに「発奏」で招待状を発した天帝（三清・玉皇）が祭場に降臨し給うのを、道士団・縁首団が迎える儀式で、全建醮儀礼中、最高潮をなす。ここでも、「発奏」、「迎榜」と同じく、道士団・縁首団は〈盥洗〉・〈肅衣整冠〉・〈賜酒〉の礼を行なったのち、礼生二人に伴われた道士が一人づつ、三清の神位を祀る天階の下に至り、三跪九叩頭の礼を行なう。全く儒礼を模した形式である。

#### (d) 受胙

祭儀の終了した翌朝、村人達は神棚に赴き、胙肉の分配を受ける。これも宗祠儀礼の最終段階で参列した衆孫が胙肉の分配を受ける形を踏襲したものと見えよう。

以上、広東正一派道士の建醮儀礼の儒礼要素を概観した。元来儒礼とは別系統の道士が儒礼をとり込んでいるのは、宗祠儒礼を金料玉条としてきた宗族縉紳の要求に適応せざるを得なかつたためと見られるが、道士側にも拜天主教の思想があり、両者の妥協の上今日の広東特有の儒礼風道教儀礼が成立したものと考えられる。なお広東道士にも上下の階層区分があり、儒礼をとり入れているのは、主として宗族村落の祭祀に出仕する高級道士に限られる。漁村や市鎮で活躍する下級道士にはこのような儒礼要素はない。これからみても儒礼要素が宗族の村落支配を背景として道教儀礼に入り込んだことは明らかであろう。

#### 四 宗祠祭祀における俗礼（演劇）の導入

さて、次に上述とは反対に宗祠祭祀の雅礼（儒礼）に俗礼（演劇）が導入されてくる現象についてのべなくてはならない。香港新界の大宗族村落ではこのような現象は認められないが、広東省南海県・順徳県などの宗族村落にその例が多い。宗祠の祖先祭祀は元来、儒礼のみで行なうべきもので、演劇を祖先に奉獻するというようなことは、通常考えられないことであるが、広東では清代中葉以降、このような習俗が大宗族の中で形成されてくる。その理由は何か、この点を宗祠本来の儒礼との関係で検討しなくてはならない。先ず実例をあげてみよう。

広東省順徳県大良村の竜氏一族は、江西から東莞県を経て元末に大良村に入ったという。そのとき一族の嗣崇と嗣広の二人

の兄弟が房を分ち、前者は東門房、後者は碧鑑房として分立する(図3 順徳大良龍氏世系図)。その後、清代中期に至り、両房は再統合し、共同して大宗祠敦厚堂を建てた。嘉慶二十二年以後、進士・挙人を出すことに、この大宗祠における祖先拜謁の儀式に演劇を挙行してきた、という。この演劇についてはその費用の一部を祖産から出すことになっていて、その運営に關して同治十三年に次のような規定が定められている。<sup>13)</sup>

一、郷會試にて「式に中れる者」、祖に謁するときは、戲四本を演じ、太祖のために慶賀せよ！ その戲価は勾く各祖管内に派して支出せよ！ 東房思成堂は一本、南房文明堂は一本、余の二本は中式の孫の近支の祖管内より酌量して分派せよ！ 每本八十円を限となし、四本共に三百二十拾元とす。多く用うれば、中式の孫の身上の補足に係る。これ旧例なり。後、戲価敷ねからざるに因り、通融して辦理し四本の価を并せて三本を演ず。今戲価日に増して昂貴たり。必ず須らく加増すべし。四本或は三本を演ずるに論なく、共に準を定め、陸百円を限となす。…

これによると、相当高価な演劇を演じており、その費用をすべて東房思成堂、南房文明堂、及びその他の祖産から出すことにしている。戲価が上がってくると、本数をへらし、戲班のレバルを落さないようにつとめていた。

またこの時の戲台の設営も豪華なものであったらしく、次のように定められている。<sup>14)</sup>

祠内の篷廠、原より一定の規模ありて増減すべきなし。惟だ頭門外は地勢寬展なれば、漫として限制なきは可ならず。今準を定め、戲台・子棚・地台・拱篷・更廠・橋路、通じて共に五百井を以て限となす。裝修銀は一十兩を以て限となし、祠内外及び子棚上に懸掛する灯色の価銀は四拾兩を以て限となす。

これによると、おそらく頭門に戲台をかけ、祠内に拱篷(左右觀覽席)と地台(芝生席)を作り、頭門外の広場に更廠(夜回り小屋)、子棚(客庁)などを作ったものと見られる。極めて大がかりのものであったことがわかる。

ところで、この一族では宗祠での演劇上演は、進士か挙人の出たときに限られるが、族譜によると、一族の挙人、進士は道光二十八年(一八二二)から光緒三十年(一九〇四)までの八十年間に、二十人にのぼる(表3 大良龍氏進士・挙人合格者)。従って平均して四年に一回の割合で宗祠演劇が挙行されていることになる。しかもその合格者はすべて南房碧鑑房から出ており、従ってその費用は、東門房思成堂が四分の一を負担するほかは、すべて碧鑑房系の祖産が負担していることになる。

以上のことを総合して、この宗祠演劇の機能、或は導入の原因を考えるとどうなるであろうか。さきの儒礼との関連ではほぼ次のように言えると思う。

前述のように、宗祠春秋祭祀の儒礼は、敬祖を名目とはしているものの、実質的には族内のエリートを際立たせるショーで

あり、宗族はこれによって対外的には自族の勢威を顕示すると共に、分節各派を競争させ統合を強化する機能をもっていた。清代後期に分派を再統合し編成された大良村龍氏のようなケースでは、大宗祠によって統合されている分支間の同祖意識は空洞化しており、従って宗祠儒礼は、宗教的敬祖行事というよりは、族内エリートを対外的に顕示するショーという性格が強くなる。同族意識が空洞化する中でこのようなショーを維持しようとするれば、族員の醜金に頼らずに共有財産でまかなう他はなく、祖産の拡大が要請されることになる。事実、龍氏の場合、咸豊以後、祖産の新設が急増し、旧来の祖産も規模を拡大している。このようにして族内エリートの顕彰による自族の勢威の対外的顕示ということが自己目的になってくると、例えば進士や舉人が出た場合には、宗祠での儀礼(儒礼)を拡大する動きがでてくる。そのうちに儒礼よりも外部へのアピールという点で効果の大きい演劇が儒礼の席を奪って登場することになる。宗祠演劇が通常の春秋祭祀ではなく、郷会試合格者の謁祖儀式から起っていることは、このことを裏づけるものである。謁祖儀式における演劇の導入は、次いで進士・舉人を生む単位である支派間の対外的声望・族内指導権を競う競争を生み、各支派は自派祖先の神主位牌を大宗祠に入祀させる進士の儀式でも華美を競って演劇を導入するようになる。このように広東の大宗祠では、謁祖→進士の順で演劇が拡大し、これは更に新春の団拜儀式にも及んで行く。つまり、ここでの演劇は、春秋二祭の

儒礼と対立する俗礼のように見えながら、実は対立物ではなく、儒礼自体に内在していた宗族の対外的自己顕示という本質が外在的に展開した、一種の転化形態、或は発展形態と言うべきであろう。

## 五 結語

以上、宗族の自己顕示としての儒礼が演劇に展開する内在的必然性について論じた。この展開は、中国の宗族が十六世紀中葉以降、分節分派間の連結・統合を強め、時には同祖關係が明確でない同姓集団の間でさえも無理に族譜を遡らせ、共同の祖先を擬定して合同するなど、ひたすらその規模を拡大して行く歴史過程に対応している。宗族がその組織拡大に走った理由は、不在地主制の進展により宗族の鄉村支配力が弱まって、収租・水利など在地の問題の解決できず府県官府に依存するようになった結果、個々の宗族にとっては府県官僚との交渉力を昂めるために規模の拡大をはかり、不断に科舉合格者を国家に送りこむことを利益とし、かつ必要としたためと考えられている。かくして各分節をつなぐ宗族祭祀、或は神誕、建醮などの大規模村落祭祀は宗族の組織拡大にとって重要な機能を担うことになる。儒礼が村落祭祀に滲透したのは、同族の各分節が一部の上昇した分派を中心に統合を強めて行って「同族連合」を形成する時期であり、宗祠に演劇が導入されたのは、元来、血縁意識が稀薄であった同姓団体が族譜を遡らせて共通の始祖を擬定し、こ

の始祖を祀る大宗祠を新設し、これを媒介に「同族合同」<sup>21</sup>を形成した時期である。本稿の検討した範圍で言えば、新界宗族は前者の、順徳県宗族は後者の例にあたる。何れにしても宗族にとつて組織拡大の上から祭祀が重要性を増したことによる変化であると言えよう。

そして以上の情勢は儒礼との調和的接合を求められるに至った演劇の側にも変化を惹き起こすことになる。以下、これについて附言して結びとしたい。

元来、演劇は社祭の迎神・逐疫などの場面で巫覡が行なう神靈降臨の憑依演出から発生したものであり、儒礼とは縁が薄い。原始的な神靈降臨の主役は、田土の豊饒を恵む田神（社公）、水を恵む竜神、田土を拓く開山神、或は悪疫を逐う英霊神などで、我が国の翁、黒尉、三番叟など、色が黒く面貌怪異な土俗臭の強い素朴な神々であったと思われる。その面影は、近年発見された安徽池州貴池県の儼戯に登場する趙公元帥<sup>22</sup>（黒面垂髯の神で害鳥を逐い、財をもたらず）、貴州徳江県の儼堂戯の開山神（斧を手に荒土を招く神）などに認められる。鬼を逐う関羽、周倉、鍾馗など黒面、紅面、黒髯の神々にも農神、田神の面影は宿っている。これらは農耕儀礼の場で演ぜられた初期演劇の儀礼演目、降神演出の原型に近いものと認め得る。

しかるに清代以降の宗族村落で演ぜられる地方劇の儀礼演目には、右のような農神、田神の面影は全くない。ここに登場する神々は縉紳官僚の衣服（儒服）をまとった「福祿寿」「天官」

などで、明らかに宗祠祭祀で培われた宗族祖先神の儒礼風の風格である。貴池の儼戯にもこの種の官縉的風格は登場しており、既に明代から宗族化（儒礼化）の傾向が始まっていたと推定される。以下、この宗族的キャラクターを若干、例示してみる。

まず、現在の華南地方劇の儀礼演目に最も広く登場するのは「天官」である。これは白面黒髯の仮面に赤い官服を着、「加官晋祿」の標語を觀衆に示す。明らかに官爵を希求する宗族の願望を演出している。<sup>23</sup>

次に科挙の神「魁星」を登場させるケースもある。貴池の儼戯にも魁星が出る。この魁星は台湾社頭蕭氏の宗祠春秋二祭では、儒礼の末尾に組み込まれているといわれ、明らかに宗族儀礼から出たものである。

また子孫、特に男子誕生を祈る演出も多い。「福」（添丁）、「禄」（加官）、「寿」（長命）を司る三老人が降臨する「三星拱照」にその願望が表れているが、<sup>24</sup>「添丁」のために特に「天妃送子」を演出することが多い。<sup>25</sup>これも宗族觀念に対応した演出である。

更に専ら科挙合格を演出する「金榜」を出すことも多い。これは状元となった若者が若妻と共に天地・祖宗を拜する演出で、さきの「調祖儀式」を模したものと見える。

このように中国の地方劇の儀礼演目が豊饒儀礼の場に相応しからぬ「宗族繁栄」の儒教系儀礼を演出するのは、本稿でのべたごとく、村落の演劇が宗族の宗祠儒礼の場にとり込まれ、宗

族觀念に接合するように改編させられた結果であると思われる。それは、敬祖に名を借りた族内エリートの外顯示のショーとしての儒礼の自己展開の一形態であると言わなくてはならない。通常の演目の中にも「元旦祝寿」の場など、宗族儀礼(儒礼)を演出する場面は少なくないが、その検討は他日に譲る。

## 注

- 1 錦田鄧氏のより包括的な世系図については、田仲一成『中国の宗族と演劇』(東京大学出版会・一九八五)一四二頁、九三八頁。
- 2 香港中文大学聯合書院圖書館、香港資料宝蔵、『錦田文献』所収。
- 3 茂荆堂の内部構造、対聯、匾額などについては田仲前掲書九四四頁。
- 4 末成道男「漢人の祖先祭祀(二)」(『聖心女子大学論叢』第五〇集・一九七七)一四四～四五頁。
- 5 山厦匪曾氏及びその祠堂については田仲一成『中国鄉村祭祀研究』(東京大学出版会・一九八九)一〇四二頁。
- 6 香港中文大学聯合書院圖書館、香港資料宝蔵『沙田文献』所収。
- 7 台湾東部海岸・羅東の天后廟誕辰祭祀は儒礼で行なわれている。一九八三年度の式次第は次の如くであった。  
一、三献礼開始。二、鼓初敲。三、鼓再敲。四、鼓三敲。

- 5、排班(主引簽、班齊)。六、執事者各就位。七、糾儀生昇階監礼。八、陪祭者就位。九、正献生就位。十、啓扉。十一、瘞毛血(奏樂)。十二、迎神。十三、進燎(奏樂)。十四、行上香礼。十五、行請祝礼。十六、行三献礼。十七、陪祭者及各界上香。十八、正献生行飲福受胙礼。十九、徹饌(奏樂)。二十、送神。二十一、誦祝者捧祝。二十二、望燎。二十三、復位。二十四、関扉。二十五、徹班。二十六、礼成(鳴炮)。
- 8 山厦匪曾氏の神誕祭祀もほぼこれと同じものと推定される。宗族が祭祀にあたり書画文物を陳列することについては、田仲一成『中国祭祀演劇研究』(東京大学出版会・一九八四)四五頁。
- 9 大田章氏については田仲前掲書(注5)一〇〇五頁以下。前掲(注6)『沙田文献』所収。
- 10 屯門陶氏建醮の詳細については田仲前掲(注5)書八一七頁。以下、順德県大良村龍氏については、西川喜久子「順德団練総局の成立」(『東洋文化研究所紀要』一〇五・一九八八)二九一頁以下による。
- 13 民国十一年重修『龍氏族譜』(敦厚堂刻本・中山図書館蔵本)所録。
- 14 同前族譜所録。
- 15 西川前掲(注12)論文二九六頁以下。
- 16 西川同前論文三〇八頁以下。

- 17 田仲前掲(注8) 書五〇六頁。 広東番禺県芳村謝氏の入主演劇の例。
- 18 田仲前掲(注1) 書九二一頁。 広東高要県水坑謝氏の新春団拝演劇の例。
- 19 上田信「地域と宗族」(『東洋文化研究所紀要』九四・一九八四) 一五二頁以下。
- 20 上田同前論文一五四頁。
- 21 上田同前論文一五五頁。
- 22 田仲前掲(注5) 書一九〇頁以下。
- 23 高倫『貴州雜戯』(貴州人民出版社・一九八七) 口絵二頁。
- 24 田仲一成「神靈降臨の演出―中国の場合―」・『祭りは神々のパフォーマンズ』(力富書房・一九八七) 七三頁。
- 25 末成前掲(注4) 論文一四〇頁。
- 26 田仲前掲(注5) 論文七二頁。
- 27 田仲同前論文七九頁。
- 28 田仲同前論文七四頁。

圖一 錦田鄧氏世系圖  
始祖  
二  
三  
四

五  
六  
七  
八  
九  
十  
十一  
十二  
十三  
十四  
十五  
十六  
十七  
十八  
……  
三十一

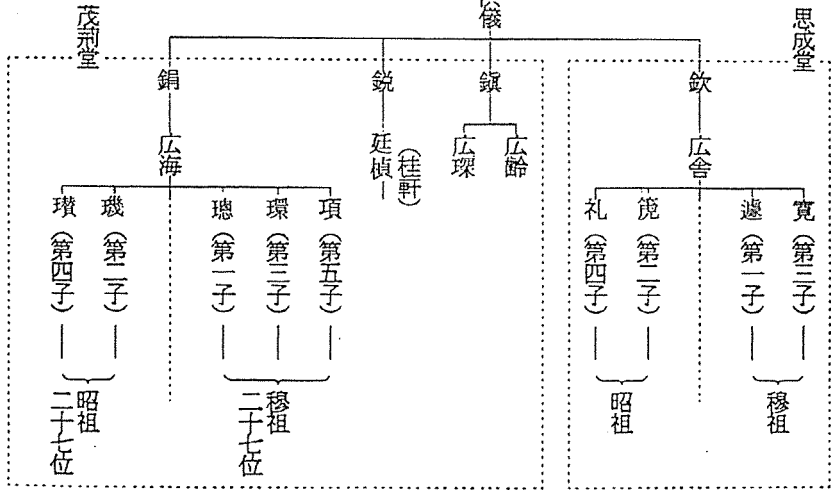
(宋)

(元)

(明)

牌板に列記

藻 鹹 嬰 冠 日 旭 符 協 布 瑞 元 亮 自 明 梓 榮 叟 辛 翁 寿 敬 安 德 尚 洪 儀





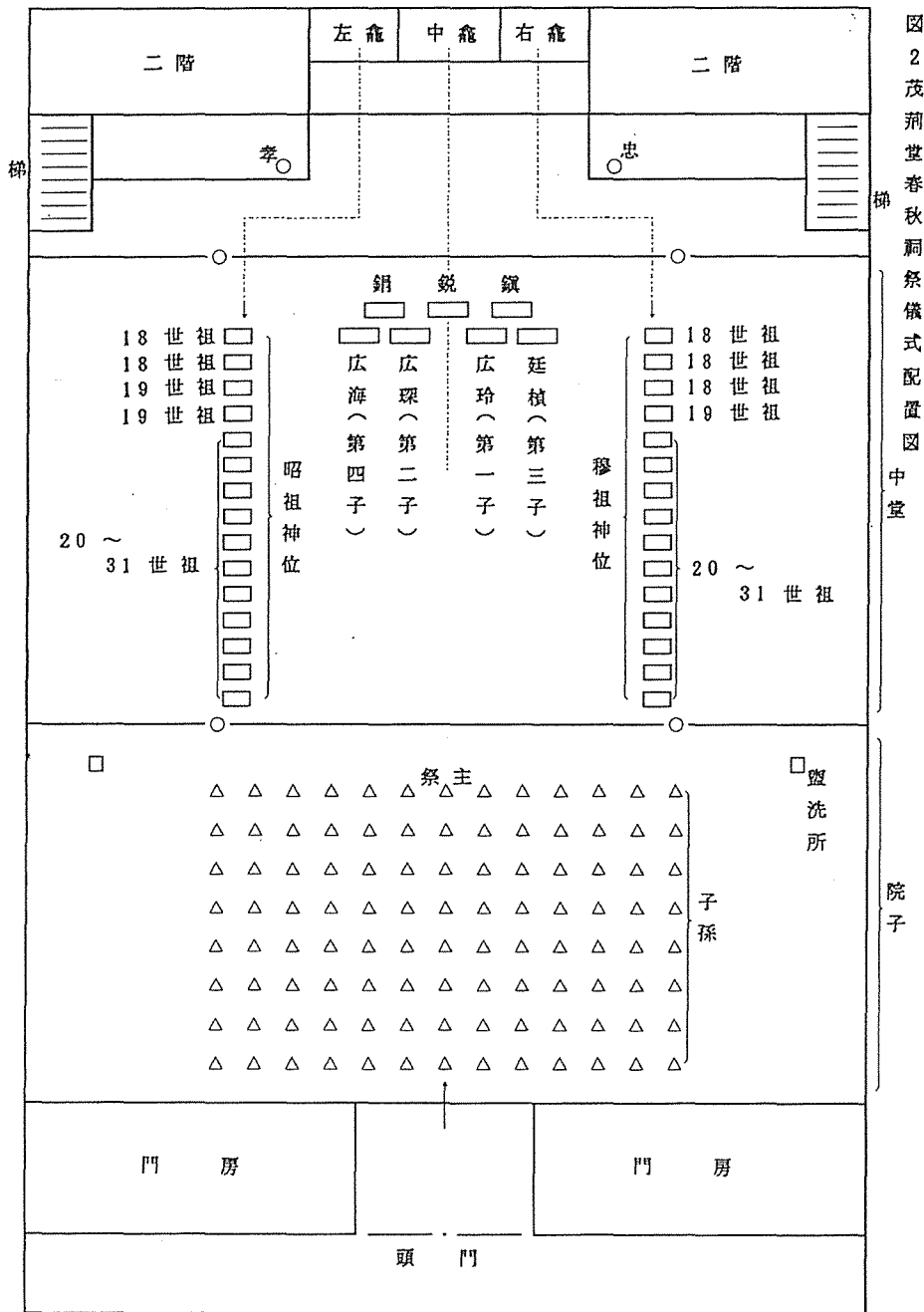


図2 茂荆堂春秋祠祭儀式配置図

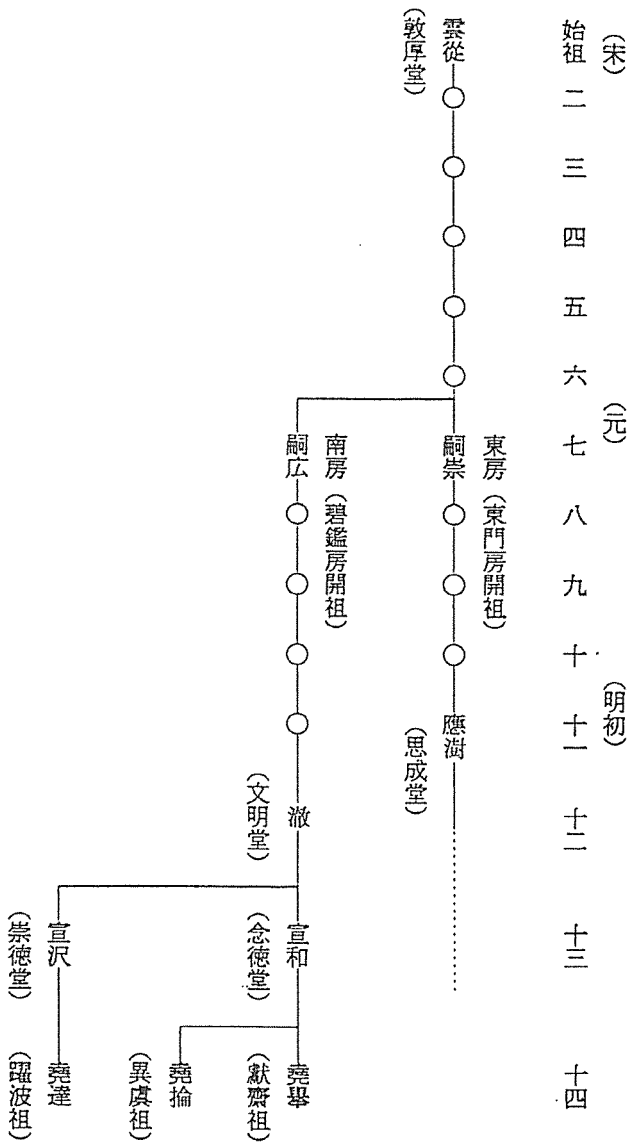
表 1 茂洞堂春秋祠祭儀式次第

<p>(一) 排壇</p>	<p>1 排列祭品 2 查点齐備</p>
<p>(二) 齐班</p>	<p>1 吹手掌炮 2 (頭炮) 赴祠(携袍帽) 3 (二炮) 赴中堂(整爾衣冠) 4 (三炮) 赴寢室</p>
<p>(三) 寢室贊礼</p>	<p>1 排班 2 上香 3 初献(啓文) 4 亞献 5 三献 6 焚幣</p>
<p>(四) 迎主</p>	<p>1 迎出神主 2 排位</p>
<p>(五) 中堂贊礼</p>	<p>1 排班 2 盥洗 3 整爾衣冠 4 上香 5 初献(祝文) 6 再献 7 三献(假辭) 8 欽福・受胙 9 焚幣</p>
<p>(六) 送主</p>	<p>1 初献 2 回送神主</p>

表 2 中門陶氏建醮祭祀儀禮日程表

日	前一日	正一日	正二日	正三日	後一日	後二日
時	上午 下午	上午 下午	上午 下午	上午 下午	上午 下午	上午 下午
儀禮	揚塵 取水 迎神 祭壇・祭筭	早朝 午朝 晚朝 分燈 祭壇・打武 小幽	早朝 午朝 晚朝 迎榜 札斗	迎聖 早朝 午朝 走赦書 放生 晚朝 祭大幽	接聖牌 酬神 分胙	拜神 行符
系統	道	道	道	道	道	道
儒禮要素	盥洗・齋衣整冠・賜酒	道	道	盥洗・齋衣整冠・賜酒・攬榜	盥洗・齋衣整冠・賜酒	受胙

図3 順徳大良龍氏世系図



	進 士	舉 人	
康熙 38 (1699)		海見 (異虞 23)	表 3
嘉慶 18 (1813)		南溪 (躍波 22), 元侃 (異虞 23)	
22 (1817)	元任 (異虞 23)		
道光 2 (1822)		元傲 (異虞 23)	大 良 龍 氏 進 士 · 舉 人 合 格 者
14 (1834)		景劭 (異虞 24)	
15 (1835)	元僖 (異虞 23)		
26 (1846)		景佑 (異虞 24)	
27 (1847)	元儼 (異虞 23)		
29 (1849)		景怡 (異虞 24), 普照 (獻齋 23)	
咸豐 1 (1851)		葆誠 (異虞 24)	
?		景韶 (異虞 24, 恩貢)	
11 (1861)		增壽 (異虞 24), 迪猷 (獻齋 25)	
同治 1 (1862)		景曾 (異虞 24)	
3 (1864)		贊宸 (異虞 24)	
6 (1867)		贊新 (異虞 24)	
12 (1873)		景愷 (異虞 24)	
光緒 2 (1876)		彭壽 (獻齋 25)	
5 (1879)		恩銘 (躍波 25)	
11 (1885)		桂芬 (躍波 25), 錫鏞 (異虞 25)	
15 (1889)		祝齡 (異虞 25)	
23 (1897)		應奎 (獻齋 25), 祝策 (獻齋 25)	
29 (1903)		鏞瀚 (獻齋 26)	
30 (1903)	建章 (異虞 27)		